別 13
60
3

307

[illegible]

砥約

二十字詰十川 凡七十枚

通計凡九百三十枚

17
24
28
4
4
2
408

44 | 24
24 | 10
200
160
3

70 | 10
44
4
2
6

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3



石は　約

田原が故郷を離れてから、もう三月を経過した。時子と堅爾の結婚式へ列する為に京都へ行った太地の隠居もマダ帰つて来なかつた。

太地の家は須茎子とナオミぎりで、須茎子は此頃毎日花壇弄りをしてゐたが、或日の午後ひよいこゆ延口から音無が入つて来たので、同音無先生が入来しつてよ。と嬉しさうに言つた。



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別 13
60
3

『先ア能く入來しつた、』と花壇に水を遣つてゐたナオミは如露を措いて眷かしさうに近寄りつゝ、『隨分か久し振でしたワネ。さア何卒お上り下すつて。』

『イヤ、今日は然うしちやゐられんので。丁度御門前を通り掛つたら須基子さんのお聲が聞ねたから鳥渡くらお寄りしたので……』とステツキを背後に凭れ乍ら、『今日は立咄しで御免を蒙ります。』

『然う、失禮ネ。夫ぢやアお世辭を申しませんから、』とナオミは嫣

こう

然して『石塚さんは近頃ちつともお見えんなりませんが、別に変ゐ事もございませんのの、』

音無はステツキでコツ〳〵庭石を叩きながら、『田原君の仕事の跡片附や留守宅の世話やらで多分忙がしいんでせう。』

『本當に田原さんでも嘸奥さんが御心配でせうネ。私も一寸お見舞に上らうと思つてゐんですが、御不幸といふのではなし、何と申上げて宜いか御挨拶の申上げやうに困るもんですからツイ御無沙汰してゐます。一體怎うなすつたんです、奥さんにまで默つて飛出してお了ひなさるツてのは。』

『さア、怎ういふ理由か、僕にも能く解らん。』

『新嘉坡へ行らしつたツて、本當に然うですか。』

『新嘉坡へ行つたには違ひないが夫ならなさは解らん。最う消息がありさうなものだと思ふが、何にも云つて來ないから、何處に何をしてゐるやら全然解らん。』

『何しに行らしつたのです。』

『何しにだか、夫も解らん。田原君に云はせれば運命の大威力に引摺られて行つたのだが、怎ういふ精神的狀態は虚僞で無いとしても、始終火山の燃ゆるやうに沸熱してゐる田原君が俄に死火山となつて西行や芭蕉のやうになり切れるもんで無い。新嘉坡へ行つたには何か或る目的があるんぢやないかと思ふが、夫は何とも云はないから解らん。』

『でも隨分思切つてゐますネ。』

も

ネ

らしいといふ話だが實際は何うだか



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別 13
60
3

夫れから

『尤もあアいふ心持には誰も時々なりますが、斷行する勇氣は有る人と無い人とある。』

『开んな人騷がせをする勇氣は無い方が宜うムいますワ。』

『音無先生、』と須基子は唐突に横合から嘴を容した。『今夜は叔母さんが歸つてらしつてよ。』

『然う。』と音無は笑ひながら、『嬉しいだらう、須基子さん。』

『嬉しいワ。叔父さんも歸つてらつしやるのよ。時……』と言掛けて口籠つたが、直ぐ言直して、『叔母さんも御一緒よ。』

『然う、』と音無は大きく點頭きつつ須基子を眤と見、『好い叔母さんが出來て須基子さんも幸福だ子。』

須基子は羞恥むやうな擽ぐつたいやうな妙な微笑と洩らした。

『世の中ッて妙ですワ子。時子さんが今夜ッから此家の主婦になつて、松本時子さんが大伴時子さんと變るんだから、』とナオミは感慨深さうに小さい嘆息をして、『女が自分の姓を棄てるといふ時は變な氣持がしませう。悲しいでせうか、嬉しいでせうか。』

東京から

お祖母さんも京都から

『そりや難問だ。女になつて見んけりや解らん、』と音無は呵々と笑つて、『だが、女は所望一生に一度は自分の姓を棄てるのが習慣になつてるから、悲しいと云つても嬉しいと云つても惰力的に鈍くなつてます。貴女も今に古座ナオミさんで無くなるから、其時になれば能く解るサ。』

『私？』とナオミはポウッと顔を染めながら、『私、イツマデも古座の姓を棄てない所存です。』

『棄てない所存でゐても棄てる時が來ます。』と音無は皮肉な微笑を泛べながら、『女ッてものは獨身の時は力んでゐますが、卒となると案外馬鹿にし切つてる男にさへ脆くも降參して了ひます。時子さんを御覽なさい。……尤も貴女は別ですが。』

『隨分皮肉を仰しやいますネ、』とナオミは片頬に微笑を見せながら故とらしくツンとして、『私を別になさらないでも宜しうムいます。』

『やッ、こりや失策つた。貴女を問題にする所存ぢや無かつた、』と音無は頭搔き〳〵、『だが、女ッてものは、近い例が時子さんのやうに學問があつても……イヤ、



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3

最う云ふまい、云ふまい。ウヅカリするこ、復た尻毛を攫まる。』

『音無先生、』こ後向きに花壇の際に蹲座んでゐた須基子は顧眄きざま、『叔母さんに密告けますよ。』

『呀、伏勢が飛出した者、』こ音無は笑ひながらステッキを抱へ直しつゝ、背後へ二歩三歩歸り掛けて、

『退却退却、捲土重來だ！』

堅爾夫婦が歸つたこ聞いた四日目の朝、音無は太地の家へ喜びに行つた。新婚の夫婦を迎へたらしい花々しい氣分が奥の間先きから溢れてゐる事こ思ひの外、家中が寂寞閑こ靜まり返つてゐた。

女關に立つて何度も音なつたが取次の返事が無かつた。家中が皆不在こいふ事もあるまいがなこ訝りながらも、格別懇意の間柄ではあり、取次が無くこも通らうかこ思ふ處へ飛んでもない時分に女中のお末がガラリこ障子を明けて音無の顔を見るこ、『呀ッ、』こ云つたぎり奥へ驅込んで了つた。

何だか侮辱されたやうな、狐に魅まれたやうな變な氣がして、奥へ通らうこいふ方角もなく茫然こしてゐるこ、暫らくしてナオミが蒼白い不安な顔を出して、

『先ア、お上り下さい。』

『怎うしたんです。變つた事でも起つたんですか？』

『先ア、お上り下さい、』こナオミは機械的に繰返して、先きへ立つて自分の部屋へ案内した。

『怎うしたんです、』こ音無は莆團に坐るなり、『痛く陰氣ですナ。』

『大變なんです、』こナオミは兩膝手を叉にして面を伏せつゝ、

『最う少し先刻堅爾さん御夫婦に御隱居さん迄警察へ喚ばれたのです。』

『警察へ？』こ音無は眼を圓くして、『怎うして？』

『夫ばかりぢや無いので、』こナオミは聲を潜めて、『昨日の午後町内の銀行が皆調べられたさうです。』

『怎ういふ仔細で？』

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別13
60
3

三八一頁

さん、好い修行をしました。此齢になつて警察のお調を受けるなんて望んだつて出來ない事です、』と皮肉な苦笑をしながら意義さうに座に就き、『然う〳〵、勝手な事ばかり云つて……先日は結構なお祝ひ物を難有う存じます、』と叮寧に禮を述べ、『若夫婦も來ましたから實は御披露を兼ねて二三日中に皆さんをお招きしたいと思つてる處へ此騒ぎで、何ともハア……』

『御災難ですナ。怎ういふ事件か知らないが、御老人まで呼出さないでも宜かりさうなもんですナ。』

『本當に音無さん、』とお常は脊を圓くして、首を突出し『豈夫か其方とも云ひませんが全く芝居のお白洲です。何故財産を不動産にして置かないのだ？　亞米利加で堅爾は何を勉強して來た？　晩雅樓は田原に呉れてやつたのか？（とお常は一々身振をして）本當に壽命が縮まつて了ひました。親子三人一度に警察のお調べを受けるなんて、本當に外聞が悪い。一體先ア音無さん、怎ういふ理由なんでせう。』

『さア……』と音無は腕拱いて眤と考へ込んだ。

『やッ、音無君、』と警察から歸つた堅爾はナオミの部屋に飛込みざま輕く會釋すると同時にドッカと坐つて、『痛い目に會つた。』

『何だネ、御挨拶もしないで、』とお常は堅爾を嗜めた。『先づお祝ひ物のお禮を仰しやい。』

『先ア〳〵お禮なんぞは宜い。お禮を云はれると却て赤面する。』と音無も輕く會釋して、『夫よりか君は怎んな訊問を受けた？』

『然う〳〵、有難う、』と堅爾は無造作に頭を下げ、『歸つて來る草々警察と來たんで、大に面啗つてお禮も何も滅茶々々だ。』

『怎んな訊問をされた？』

『一向要領を得ないが、去年の春アラスカへ行つた時、アラスカの勞働組合の會長を尋ねて來た中村と云ふ男があつた。外國旅行先きの日本人同士だから一度や二度は口を利いた事があるが、其の男と僕との關係を頻りに詳しく訊くんだ。』

二行アキ



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3

「中村？」ミ音無は膝を乗出して、
「新嘉坡の中村春吾君ぢやないか
本」
「然うかも知れないが、君は其男
を知つてるのかエ？」
「イヤ、會つた事は無いが、新嘉
坡の中村なら勞働新聞ミいふ新聞
の主筆だが發行者だかで、毎號田
原君の處へ新聞を送つて來た。」
「夫、夫、夫だ！」ミ堅爾は膝を
礎ミ叩いて「何でも其男の許は田
原君が在るらしいので、何か近頃
其男ミ田原君ミを中心ミする事件
が持上つたらしいんだ。そこで僕
がアラスカで其男に合つたミいふ
事が怎うして知れた事、其筋に解つ
たので、何でも田原君ミ中村ミ僕
ミの三人の間に何かの聯絡が有り
はしないかミいふ嫌疑なんだ。」
「怎ういふ事件なんだ？」

「兄貴が死んでから田原君に財政
整理をして貰つたのを緊要では能
く知つてゐて、イクラ禮をしたか
ミ訊かれた。禮なんぞは一文も出
さないミいふミ、其んな筈は無い
ミ飽くまでも追究された。何にも
狡しい事は無いから平氣だが、警
察で訊問されるのは餘り好い心持
ぢや無いナ。」ミ堅爾は苦笑した。
音無は無言で二つ三つ續けて點
頭いた。暫らくは田原の追懷が胸
一杯で堅爾も時子も忘れてゐた。
音無は田原の外遊が西行や芭蕉
の遯世ミ略ぼ似通つた唯の精神的
欣求の爲めばかりだミ初めから思
つてゐなかつた。必ずや明らさま
に打明けられない理由や渡航後の
計畫があるに違ひないミ竊かに想

ぞこが解らんの如かぶ、どうも田原君が
今何所に居るの如かぶ、夫れすら見當が
付かない。」
「いうん、誰にも解らないんだ。」と音無は
苦笑した。

嬉しいは居るが、今更發ぶ事が、大地家を
出潮ったといふについては、就しく何事か
勝上つて居るのではないかと思はれて、
急に田原の隨ぶ宅が氣に懸りました。



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3

『夫ぢやア今日は失敬する、』と俄に思付いたやうに座を起つた。

『先ア宜いぢやないか、』と堅爾も留めれば、『お宜しいぢやありませんか、御緩りなすつても、』と時子も一緒になつて引留めた。

『イヤ、復たユックリ參上る。今日はお取込だし。僕も田原君が心配で沈着いてゐられんから失敬する、』と云ひつゝ音無は四人に送られて太地の玄關を出た。

太地を尋ねる時は、時子が怎んな顔をするだらう。弟のやうな石塚を手玉に取るやうに弄り物にしたり、心にも無い媚を作つて自分の道念を試さうとした高慢ちきの時子、男の愛を風船玉のやうに翫弄にして脹らましたり萎びさしたりして、擧句が破裂らしても何とも思はない蓮葉者の時子、純潔だの處女の愛だのと口にしながら

の時子が腸の底まで讀まれてる苦手の自分の前へ出る時怎んな顔をするだらうといふ興味が肚の中に沸々としてゐたが、田原の身上

上に落ちた時は最う時子どころで無かつた。太地の家の笹龍膽の紋を付けた紫紺の羽織を着た時子を見ても堅爾の妻と思ふ外は苦笑も反感も冷笑も無かつた。

音無は[illegible]田原の事件が胸一杯で、何處を怎う行くといふ方角もなく屈託顔にブラ〳〵する中に何時の間にか田原の家の前へ來た。

『私は覺悟してゐますワ、』と貞子は少しも狼狽へた氣色なく、『所詮良人の事ッてすもの、札所廻りの六部のやうな心持で彪を隱したので無い事は解つてますが、唯皆さんに御迷惑が掛らなければ宜いがと夫ばッかりを心配してゐます。』

『そりや大丈夫ですよ、』と音無は左も知れ切つたと云はぬばかりの萬事を呑込んだ顔をして、『田原君



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別 13
60
3

の事ですもの。人に迷惑を掛けるやうな事をして置くもんですか。』

『私も他人樣に御迷惑を掛ける事はしてゐなからうと信じてゐますが、』と斷言りつゝも貞子は物案じ顏に、『太地さんの皆さんが警察でお調べをお受けになつたのは怎ういふ廉なんです？』

『夫が要領を得ないのですが、此手紙に由ると田原君が金を持つてゐたらしいので其金の出し手は誰だらうといふ疑問が警察側にあると見ゐますナ。そこで太地の家は先代以來田原君と親族同樣な關係になつてゐたのと、最一つ甚だ拙いのは此手紙にある中村といふ男と堅爾君とは先年アラスカで偶然會つてゐるさうです。怎うして嗅付けたか知らぬが、警察では此事を知つてゐて、堅爾君と田原君と中村と三人の間に或る默契が成立つてゐるやうに思ひ、夫や是やから太地を新嘉坡事件の資本供給者と睨んだらしい。太地の家のもの、調べられたのは皆金錢關係で、此町の銀行も皆帳簿や取引關係を調べられたさうです。』

『先ア！』と貞子は眼を瞠つた。

『處が何にも無い。警察では初めから然うと定めて掛つてるかのやうに、其んな筈は無い、家事整理の時はイクラ禮をしたの、晩稚樓は無償與れたのかのと、根掘葉掘訊いたさうです。』

『先ア、お氣の毒ですワ子。』

『何アに、其んな事は御心配なさらんでも宜い。實際田原君が迷惑を掛けてゐるなら知らん事、何にも寢方の無い事を藪睨みの誤解をたからッて此方に對して不快の感を持つ理由が無い。其位な事は堅爾君は勿論、太地の老人にだつて解つてゐます。』

『でも良人の事件の爲めにお年寄までが警察へお呼出されになつたては眞實に濟みませんワ子。』

『夫よりか奥さん、』と音無は貞子が餘り沈着いてゐるのが戻かしさうに、『田原君の方が大事ですよ。』

『良人の方は覺悟してゐます。初めて貴方から顚末を伺つた時こそ寢耳に水で吃驚しましたが、横濱で別れました時、何にも云はないでも良人の心持が能く合點めますと、私は何て愚かな女だつたらうと多勢の人中で取亂して騷いだのがお恥かしくなりました。夫からは私も覺悟が定まりました。あの

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別 13
60
3

あの三輪崎の陰が

三行アキ

に知らぬ他國へ行つて

この岸壁は最後の別れで、最う一生良人には會ふ事が出來ない……』と貞子は健氣に言放ちながらも俄に言葉を途切らして了つた。

『立派なお覺悟だ、』と音無も半ば聲を飲みつゝ、『然う伺へば安心です。今度の事件は唯の一時の嫌疑で直き無事に落着することは信じてゐますが、萬に一つですナ、人間は何時怎んな運命に虐げられるか解らんから、假に面白からぬ事が田原君の一身に起つたとしても、貴姐は少しも驚く事は有りませんよ。怎んな運命が墜落つて來ても泰然として在らッしやい。喫驚しちや不可ませんよ。』

『大丈夫な心算でムいます。』と貞子は密と涙を拭きつゝ嫣然微笑んで、『何卒無事に濟むやうに祈つてはをりますけれど、疊の上で死ぬのも如何な所で死ぬのも悉皆運命ですワ。罪が有つても無くても、恁ういふ運なら仕方がないので、私は疾うから諦めてます。第一、良人の身になりましたなら自分の思ふ通りの事をしてそして其の爲に死んだつて本望でムいませう。』

音無は無言で幾度も點頭き、貞子の潔氣な言葉に感激して暫らく瞑目沈吟してゐた。何んにも知らない哲子と丈太郎が無邪氣にキャッキャと騒ぐ聲が庭前から聞ねて何んとなく胸の感るやうな心持がした。

覺也は約婚以來一度も太地の門を潜らなかつた。罷々迂路をして門内の須基子を垣間見、時折は門前の飽氣ない立咄しと牽牛織女の逢瀬のやうに樂む事はあつても決して閾を跨がなかつた。夫故、如何に據ろない必死の場合であつても、愈入籍披露を濟ますまでは決して出入をしないと盟つた手前に對しても太地の門を潜るは後目痛くて躊躇された。

加之ならず、太地の家の空氣は變つてゐる。堅爾とは昔しの同窓ではあるとは云ふ條、十何年も山海萬里を距てゝゐた上に、歸朝早



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3

早故郷を去つて舊交を温める機會が乏しかつた。且其上に自分を手球に取つて舌を出して笑つた時子が現に堅爾の妻として一家の采配を揮つてをる。覺也の怯懦心は縱令敵地に入るほどでなくとも底の知れない、急流を瀬踏みするの恐れを抱いて逡巡がざるを得なかつた。

が、思切つて玄關に立つて、『御免下さい、』と云ふと、暫らくして弱しい跫音が廊下に聞ゑて、すウツと障子を明けたはナオミで、

『呀、お珍らしい。さア何卒、』と平生の馴れ〳〵しい調子で覺也を自分の部屋に案内し、『暫らくお待ち下さいよ、』と言ひつゝ部屋をソソクサと出て行つた。

三分經ち、五分經ち、十分二十分經つてもナオミは顔を見せなかつた。誰より先きに須基子が一番に顔を出しさうなものと思つた事も空頼みとなつて、覺也は焦々したりモジ〳〵したりしてゐると、

『お待たせしました、ツイ手離せない用事がありましたので、』と云ひつゝナオミが入つて來た。

『何う致しまして。御用の處をお邪魔しました。』

『否エ。』とナオミは平生のやうに嫣然したが、何處か調子が餘所餘所しかつた。

『實は御報告旁御相談に上つたのですが。』と覺也は努めて冷靜を粧つて、『僕の新聞が財政上の都合でもう發行が出來なくなつたんです。』

『ゑッ、』とナオミは喫驚して眼を睜つて覺也を見た。

『其善後策を御相談に上つたのです。』

『先ア、』とナオミは深い嘆息を長く引いた。

『堅爾君御夫婦がお歸りになつてゐさうですが、鳥渡お目に掛れませんでせうか？』

『飛んでも無い事になりましたワ子エ、』とナオミは再び深い嘆息をして、『堅爾さんにですか、』とナオミは當惑さうに眉を顰めて、『堅爾さんは先刻から頭痛がするつてお臥みになつてますから、お取次しても難かしう厶いませうよ。』

『然うですか。御病氣なら仕方が無い。復た明日にでも上る事にしませうが、御隱居さんは在らッしやるでせう？』



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別 13
60
3

『はア、在らツしやいますが、唯今生憎お客様で……、』とナオミは言憎さうに、『今日はお目に掛らないから宜しく申上げて呉れと先刻仰しやいました。』

『然うですか、』と覺也は面白からぬ顔をして、『時子さんは？』

『時子さんも矢張お客様のお對手をしてらツしやるので、今日は失禮すると仰しやいました。』

『須基子さんは？』と覺也の顔色は最う變つてゐた。

『在らツしやいます、』とナオミは氣の毒さうに覺也の顔を見、『ですけれど唯今お稽古中でお目に掛る事は出來ないからと、御隱居さんの仰しやりつけで厶います。』

『須基子さんにも？』と覺也は覺ぬずブル〳〵と慄へた。

ナオミは俯目に暫らく眤と考へ込んでゐたが、軈て面を擧げて『石塚さん、』と氣の毒さうに同情の籠つた聲で、『貴方のお心持をお察しします。こんな冷たい待遇を受けやうとは貴方は思つてゐらツしやらなかつたでせうが、之には種々事情があるので、何れ今晩にも音無さんに委しくお話しします から、今日は此儘默つてお歸りなすつて下さい。』

『音無君に話さないだつて、』と覺也は迫込んで、『事情があるなら僕自身直接に承はりませう。』

『そんなにお急ぎにならないで、』とナオミは聲を潜め、『お腹の立つのは御道理ですが、爰で貴方が大きな聲をなすつては却て面白くないから、何にも仰しやらないで默つて歸り下さい。』

『默つて歸れつてなら默つて歸りませう、』と覺也は顔色變へてブルブル慄へながら、『だが古座さん、貴姐も御承知だらうが、僕と爰の家との關係は戸籍上の手續きこそ濟まないでも玄關拂ひされる唯の他人同士ではありませんよ。仰に從つて默つて歸りませうが、自分の靈を傷つけられた怨みは一生忘れませんから。』

ナオミは氣の毒さうな顔をして何度も默つて點頭いた。

其晩ナオミは音無を訪問した。

『然ういふわけで、私、石塚さんに眞面にお氣の毒で堪らなかつたのです。』



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別 13
60
3



『ぢやア何ですか、』と音無は眼を圓くして、『石塚君との約束を破談しやうといふんですネ。』

『結局は然うなんです、』

『开んな亂暴な事があるもんですか。縱令ば田原君が怎んな事を仕出來さうと石塚君には何の關係も無い。第一田原君の事件からして何でも無い。大方今頃は最う放免になつてるかも知れない。』

『夫が然う手輕い事件で無いらしいと云ふんです。』とナオミは四邊を憚るやうな低い聲で、『石塚さんが入來つた時は丁度大野辯護士をお招きして相談最中だつたのですが、大野さんは警察側の意見もお聞込みになつてるさうで、事件の發展次第では太地家にも意外な飛塵が振り掛るかも知れないといふので、御隱居さん初め堅爾さん御夫婦も青くなつてお了ひなすつたのです。』

『どういふわけで？』

『法律上のお話しは私には能く解りませんが、』

『ふウむ、』と音無は腕拱きつゝ太い息をして、『困つたナア。开んな事件とは知らなかつた。』

『そすから御隱居さん初め、田原さんには今まで色々お世話になつて親戚同樣の關係ではあるが、家には代へられないからお氣の毒でも此際思切つて一切の關係を解いて了ひたいといふ皆さんの御相談が定つたのです。』

『そんな馬鹿な……』と音無は苦々しげに、『そんな馬鹿な事を周章てゝ仕たつて、過去の關係が消ゑるもんぢやない。生中小細工をすれば却て益嫌疑を增す道理だ。』

『私も然う思ひますが、大野さんの御意見で、御隱居さんが何でも然うしなければ太地の家が危ないと氣を揉んでらつしやる。』

『堅爾君は默つてるんですか？』

『あの方は阿母樣の前では口が利けませんからネ。夫に時子さんが矢張一緒になつて……、』とナオミは較や曖昧に言葉を濁らしたが、聽て何んとなしに皮肉な微笑を口邊に寄せて、『最う家ぢや時子さん天下ですよ。堅爾さんは勿論です



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別 13
60
3

315

夫れから音無さん、今日は左地家の

財産は須基子さんの分も堅爾さんの分も全部時子さんの名前に切換へられる事になつたんですよ。』

『全部時子さんの名前に？。』と音無は益呆れた顔をした。

『ねエ、然うした方が此場合安全だといふ時子さんのお考へにお二人とも御同意なすつたんです。』

無論大野さんの法律上の御意見が基礎になつてるんですが、肝腎の恁ういふ時の頼みにならういふ時子さんまでが少とも力になつて下さらないで、口先きではお氣の毒だお氣の毒だと仰しやるが、心の中では御自分達の利益ばかりを考へてらツしやる……』

『尤も人間てものはミンナ开んなものだ卒となると頼みになる奴は一人もない、』と音無は吻と嘆息をして、『夫にしても石塚君は氣の毒だ。失望して自棄にならなければ宜いがナア……』

『私、眞個に石塚さんにお氣の毒で堪らないのです、』とナオミは染々氣の毒さうに頸を曇らした。

『大野さんのお咄では、』とナオミは再び言葉を更ため、『石塚さんも事に由ると起訴されるかも知れないといふのです。』

『そりや警察の遣口一つで何とも解りませんネエ。』

『ですから御隱居さんは益青くなつてお了ひなすつたんです。可愛い〻孫を罪人に妻合しては先祖に濟まないと仰しやるんです。』

『そりやア犯罪にも由るサ。一概に罪人だからツて忌避する道理は無いが、开んな事は左に右く石塚君はマダ起訴されるかドウカ解らず、起訴されるにしても必ず有罪と定らんぢやないか。』

『何しろ御隱居さんが最う、石塚さんは田原さんの連累者と定め込んでらツしやるから。』

『困つて了うナア、』と音無は吻と歎息をして、『實は僕は夫程の重大

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3

316

事件とは思はんのです。大野君が法律上の鑑定が然うだと聞いても矢張何でも無い小事件と思つてるのです。

處が石塚君と來たら全で無神經です。無論之が爲めに起訴されるとも思はず、事件其物を極めて小さく考へてゐるから之が爲めに一生の運命を破壞する不幸が落ちて來やうとは恐らく夢にも思つてますまい。貴姐のお咄に由ると、女關拂ひ同樣な目に會つて痛く憤激したらしいが、夫は一時ムカ〳〵としたゞけで、之が婚約破壞の無言の宣告だとは決して感づかなかつたでせう。夫ほどマダ單純な正直な青年ですから、愈破約と聞いたら夫こそ眞に一生の致命傷で、自棄になるか氣が違ふかして一生を葬むつて了ふやうな氣の毒な事になるかも解らん。』

『眞個にお氣の毒で堪らないのです、』とナオミは下を向いてホロリと一雫落した。

『須基子さんはマダ兒供だから夫程でもあるまいが、石塚君は自分の靈魂よりも須基子さんを大切に思つてる故、須基子さんを失つたなら石塚君の靈魂も一緒に亡びて了う。石塚君の生命に代へてもと思ふ眞の熱愛がどれ程須基子さんの一生を幸福にするか知れないと我々は太地家の爲めに喜んでゐたのだが、恁ういふ貴い愛を些細な嫌疑ぐらゐで破壞して將來のある青年を精神的に殺すなんて、實に殘酷極まる。ナオミさん、』と音無は我知らず激昂して、『貴姐は恁ういふ殘酷な相談をするのを默つて聞いてゐたんですか？』

『然う仰しやられると私も申譯が有りませんが、家庭教師といふ條矢張使用人ですワ。御隱居さんを動かす力もなし、時子さんに反對出來る位置でもありませんワ。私が頑張つて見た處で何の役に立ちませう。あれ程深い關係であつた田原さんの御家族にさへ思ひ切つた事をなさる場合ですワ。私は無論意氣地の無い人間ですが、私の立場も察して下さい。』とナオミは



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3

三九合

更に言葉を柔げて『尤も其中には事件も落着しませうし、石塚さんの嫌疑も屹ど晴れませうし、餘燼さへ冷めれば再び恢復しは怎うにでもなります。ですから石塚さんにも決して失望なさらないやうに貴方から能く慰めて下さい……』と云ひつゝナオミは一封の包みを懐中から出して

『私、實は明日にも須基子さんと一緒に暫く遠方へ行くやうに吩咐かりました。尤も前から上京する豫定になつてゐましたが、今度の騒ぎで急に繰上げましたので、明日か明後日かはマダ判然しませんが多分最う之ぎりお目に掛れまいと思ひます。夫で實はお暇乞を兼ねて上つたのですが、此のお金は誠に少しばかりで、差上げるも云つては失禮で厶いますが、石塚さんの今後のお入用なり何なりにお費ひなすつて下さいまし。』

『之は金ですか、』と音無は手にも觸れずに苦り切つて、『太地家から呉れたんですか？』

『否エ。私の。ほんのポッチリでお恥かしう厶いますが、』とナオミは顔を赤くしつゝ紙包みを音無の膝近くへ押進めて、『石塚さんも之からは定めしお入用が多からうと存じますから、何卒私にも同情の御用をさせて戴きます。』

『貴姐の御厚意なら石塚君も感謝して受けませう、』と云ひつゝ音無は包みを請取つたが、俄に怪訝な顔をして烏渡首を傾げ、『失禮ですが披けて見ます……』と包みを披いて、『こりや大金だ！』と矢庭に投出し、『太地の手切金なら石塚君は請取りますまいよ。』

『好い加減に仰しやい、』とナオミは片頬に笑みながらも、浮かした調子で、『私が手切金の取次をする女か女でないか少しは私の人格を見て下さい。貴方にも似合はない事を仰しやる。』

『悪るかつた、』と音無は羞恥わるさうに頭を掻きながら、

『こんな大金を石塚君だつて無暗に頂戴する事は出來まいが、左に右く御厚意を傷へませう、』と音無は包みを片寄せて、『此場合金の要るのは看ぬいてゐるから、御厚意に甘えて拝借するまでもして戴くのですが、イクラ有ります？』

『三百圓許り入つて居ります。』



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別 13
60
3

『三百圓あれば相當な辯護士を賴めるし、石塚君も大喜びで感謝しませう。』と音無は喜色を面に泛べつゝ、『金を貰つてお諂かるでは無いが、貴姐のやうな人情に厚い人もあるし、時子さんのやうな昔の友達を死地に陷れる冷酷な人もあるし、樣々ですナア。』

『否エ、時子さんだつて开んな不人情な人ぢや有りませんワ。唯恁う申しちや失禮ですが、あの方は少し嫉妬心があるやうですワ。』

『少しどころか、大有りです。僕はチヤンと見拔いてる事があるんです。默つてはゐますが。』

『[illegible]あの方は唯男を弄かうばかりでなく多少か移り氣でゐらツしやるやうですワ。』

『先ア一と目に云へば浮氣者サ。あの女の爲めに一生を誤つた者は僕の友人中にも澤山ある。石塚君なぞも捌毛序に手玉に取られた一人だが、萬更何でもないものを弄かつたのでなく、矢張イクラか氣があつたんだらう。』

『貴方も矢張何ですツてチ？』とナオミは皮肉な微笑をした。

『僕かい？僕こそ捌毛序に猪爪を出して見たのサ。』と音無は面羞けに顏を赤くして、『惡戲小僧が動物園の猿に石を投げるやうな心持で鳥渡弄かつて見たんだ。こんな朴念人ぢや張合拔けがしたらうが此方も好い面の皮サ。』

『罪ですワチ。貴方のやうな世馴れた方ならまだしもの事石塚さんのやうな初心な方を弄かふのは、眞個に罪ですワチ。』

『しかし弄かはれる方も惡いんですよ。畢竟隙があるから乘ぜられるんですからナ。』

『然う云や然うですけれど、時子さんのは別段ですワ。』とナオミは一段聲を落して、『此場ぎりのお話ですが、今度の破約も御隱居さんの一酷は解つてますが、時子さんの餘まり冷淡過ぎるのが解らないのです。矢張嫉妬心が幇助つてゐるんぢやないかと思つて。』

『若し然うなら實に怪しからん。』

『そりやア私の邪推かも知れませ



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3



んが示……」

ナオミが何か言ひ出さうとした時、「音無君、音無君」と戸外(おもて)から叫びつゝ、ガラリと格子(かうし)を開(あ)けて飛込んだ覚也は、音無に電報を突つけたまゝ聲が出なかつた。

御(やつ)との事に喉笛(のどぶえ)の破裂(はりさい)けるやうな声を甲走らして「田原先生が死んだ！」

……以下原稿紙二十五枚削除……



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
3

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

別13
60
3

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用